

## ボランティア依頼の受け付けと学生の参加促進への取り組み

### 1. ボランティア募集团体の登録について

ボランティアセンターでは、ボランティア募集团体に「団体登録」（詳しくは、<http://voluntee.meijigakuin.ac.jp/recruit/index.html> を参照）の手続きを依頼している。団体や募集情報の確認や修正のため、今年度は3年に一度の更新作業を実施した。149団体が再登録し、2011年1月の時点での登録団体は238である。

### 2. ボランティア募集团体による説明会の開催

今年度は海外スタディツアー（地球市民 ACT かながわ、地球の友と歩む会、Caring for the Future Foundation Japan）や国際ワークキャンプ（NICE）、障がい児の余暇支援活動（横浜市社会福祉協議会）、みなとみらいクリーン大作戦などの活動を紹介する説明会を計4回、横浜ボランティアセンターが主催となり実施した。説明会では、活動経験のある学生から体験談を紹介することで、参加者が実際の活動にスムーズに入れるような工夫をした。その結果として説明会への参加率の向上がみられた。

### 3. キャンパス近辺の活動の参加促進

白金・横浜両センターとも「キャンパス近辺・オススメボランティア情報」を年間に2回作成し、キャンパス近隣の活動への参加を促した。横浜センターにおいては、明学生の活動実績がある活動先を「オススメボランティア情報」として紹介することで、活動を身近に感じられるような資料づくりの工夫をおこなった。そのほかに白金センターでは、毎年9月に開催されるスリランカフェスティバルにあたり、50名の学生がボランティアとして参加し、横浜センターでは戸塚地域で行われる夏まつり等に述べ人数で45名の学生が関わるなど、地域と学生の交流が進展した。（白金、横浜両センターが進める地域との協働した活動については、本書25～68ページを参照）

### 4. メールマガジンによる情報提供

今年度は通常号、ボランティア情報号、臨時号を合わせて、合計22回の配信をおこなった。内訳としては毎月1日に配信する通常号（センターの主催行事やイベントの案内、学生スタッフやその他の学生から寄せられた情報等が掲載）が10回、毎月15日に配信されるボランティア情報号（センターが登録している外部団体から寄せられる新着ボランティア情報の紹介）が11回、主に学生からの寄稿による臨時号を1回配信した。また、2011年1月31日現在、登録者数は321人であり、うち学生は272人、教職員は49人である。2006年度からスタートしたメールマガジンによる情報提供が安定的に進んでいる一方、窓口に来室する学生のなかにも、メールマガジンの存在を知らないケースも見られるので、今後さらに広報を充実させる必要がある。また学生や教職員が求める内容をタイムリーに配信できるよう、さらに努力していきたい。

## 5. サークル・グループの特技を生かしたボランティア

センターでは、学生と地域の交流・協働を促進するために、学生サークル・グループと地域のニーズをつなぐコーディネートをおこなっている。今年度の活動状況は以下の通りである。

学生サークル・グループ	地域の活動先
〔JUNKO Association〕	グランフォーレ戸塚自治会「桜まつり」(4月4日)
〔なんとかなるさ〕	グランフォーレ戸塚自治会「桜まつり」(4月4日)
〔JRP〕	グランフォーレ戸塚自治会「桜まつり」(4月4日) 舞岡自治会の夏祭り(8月8日) 横浜市立倉田小学校はまっ子ふれあいスクール「クリスマス会」 (12月17日)
〔管弦楽団〕	横浜市上矢部地域ケアプラザ(7月10日、3月2日) 横浜市上倉田地域ケアプラザ(12月20日) 地域子育て拠点ととの芽「クリスマス会」(12月24日)
〔落語研究会〕	東京都江東区古石場福祉会館(9月20日)
〔マンドリン〕	神奈川県立鎌倉養護学校(8月27日)
〔手話サークルぽっけ〕	横浜市立東戸塚小学校「秋まつり」(11月14日) 横浜市中倉田地域ケアプラザ(2月20日)
〔チアリーディング SCARETS〕	横浜市立東戸塚小学校「秋まつり」(11月14日)
〔吹奏楽部〕	港区青少年対策高松地区委員会「ふれあいミニコンサート」 (3月5日)

今年度は管弦楽団が年間4回訪問演奏して、主に戸塚地域との交流を深めた。特にJR東戸塚駅前の子育て支援施設「ととの芽」からの依頼で実現した管弦楽団による演奏は、小さいお子さんを抱えているため、生の演奏を聴く機会が少ないお母さんたちに大変好評であった。戸塚の大規模マンショングランフォーレ戸塚自治会が主催する「桜まつり～未来に残そう桜並木」では横浜学生スタッフをはじめ、横浜キャンパスを拠点に活動する上述の4つのサークルが関わり、マンションの住民と明学生の交流が生まれた。この祭りで学生のパフォーマンスをみた住民が東戸塚小学校の「秋祭り」にも学生を招待するなど、地域との交流が広がっている。

## 6. まとめ

センターの方針である地域との協働の推進が、白金・横浜両センターとも進展していた。また参加促進の手法として今年度試みた活動経験のある学生、明学生の活動実績のある団体と協力しておこなった説明会は効果的であったので、今後も引き続き実施し、学生の地域参加を拡大していきたい。(市川)

## 2010年春期・夏期「国際機関実務体験プログラム」～参加学生の学びと活動の広がり

### 1. はじめに

本ボランティアセンターでは、2004年度より（財）横浜市国際交流協会（YOKE）と共催で「国際機関実務体験プログラム」を実施している。本プログラムはYOKEが横浜市内に集積する国際機関の活動を広く市民に周知する目的で市内の大学に協力を呼びかけたことにより始まり、プログラム全体のコーディネートをおこなうYOKE、受け入れ機関である国際機関、学生を派遣する大学（明治学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学、フェリス女学院大学）の3者が協働で運営している。本稿では学生を派遣する大学の立場から、ボランティアセンターのプログラムへの関わり、プログラム参加によって得られた学生の学びと成長、プログラム修了学生の活動の広がりを中心に報告したい。2010年度の報告書であるが、春期プログラムが年度の変わり目のため、2010年の春期と夏期について記す。

### 2. 2010年春期・夏期プログラムの実施状況

2010年春期には国連大学高等研究所（UNU-IAS）、アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター（IUC）、夏期には国連食糧農業機関（FAO）、（財）横浜市国際交流協会（YOKE）の計4機関で各1名の学生が参加した。参加学生の募集は大学が2009年10月（春期）と2010年5月（夏期）に行い、書類選考と個人面接を経て決定した。プログラムに携わるYOKE、国際機関、大学の役割とスケジュールは【表1】としてまとめた。

### 3. プログラムから生まれた学生の学び

本プログラムでは「国際交流や協力の実務体験を経験することにより、大学で習得した学問と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材の育成」を目的としている。学生はあらかじめ国際機関が用意した活動を遂行することとなるが、プログラム全体として、オリエンテーション、実務体験、中間研修会、最終報告会が組み込まれており、学生たちはオリエンテーション時に設定した研修テーマと目標を意識しながら活動を進めていく。研修テーマと目標を明確にして国際機関での活動に取り組むことにより、本センターでは、特に国際機関での「体験」を「学び」へと昇華することを目指している。またそのプロセスにあたっては、プログラム全体を運営するYOKE、受け入れる国際機関、学生を送り出す大学がそれぞれの立場で支援している。例えば、春期に国連大学高等研究所の「国際里山イニシアチブプログラム」に配属され研修した学生は、当初研修テーマを「国連大学に溶け込み、与えられた役割を全うする」という、漠然とした考えで進めようとしていた。しかし、中間研修の際にコーディネーターが、「国連大学高等研究所の環境プログラムだからこそできる、あなただからこそ掘り下げられるテーマをぜひ見つけてほしい」と助言したところ、研修の後半では、国連大学のスーパーバイザーの指導のもと「中東の環境問題」をテーマにして取り組むこととなった。これはイラク人を父親にもちアラビア語ができる学生の特性と国連大学で配属されたプログラムの

内容を反映させたものであった。中東の環境問題に絞って調査を進めた結果、学生は「イラク南部のメソポタミア湿原の荒廃」という事実を発見した。イラクで進む環境破壊については紛争の影に隠れて国際社会からの注目されることが少なく、国連大学のスタッフであっても十分に認識している事柄ではなかったが、学生は研修の成果として今後国際社会はイラクで進む環境破壊にも関心を持つ必要があることを、報告会の場で示していた。

夏期にFAOで研修をした学生は、紛争解決や平和構築に興味がありプログラムに応募した。研修ではアフガニスタンやパキスタンの農業支援を専門とするスーパーバイザーのもとで問題意識を深め、「アフガニスタンの食糧不安にみる農業支援」というテーマで研究レポートを作成した。プログラムを通して学生は、紛争解決においては戦争状態が解消されたあとに人々の生活をどのように安定させていくかが大切であり、農業の復興は人々の生命の維持につながる重要なテーマであること、プログラムに参加する以前は、国際社会が抱える問題と学生の実家で営んでいる農業が抱える問題は別々のものと捉えていたが、農業を社会のなかで持続的に発展させることの重要性や課題については、双方に共通性があることを学んでいた。

#### 4. プログラムをきっかけとして、生まれたアクション

ボランティアセンターは、プログラムで得た学びをもとに地域社会や大学コミュニティに対してはたらきかけることもバックアップしている。春期にIUCで研修した学生はプログラム参加を通して、自分の身近な場で日本人と外国人との交流や相互支援関係を築くことが重要と考え、日本人学生とアジアからの正規留学生との交流活動を大学内で作った。これはマレーシア出身の留学生であるボランティアセンター横浜学生スタッフとともに発案し、周囲の学生たちと協力しながら取り組んだものであるが、たくさんの方の協力者を得ながら今年度大きく発展することとなった。（詳しくは、本書「ボランティアセンター横浜学生スタッフ報告」57～61ページ参照）

夏にYOKEで活動した学生は、行政、NPO、学校など多様なアクターによって進められている横浜における在住外国人支援について、明学生に知ってもらいたいという考えから、本センターでおこなっているボラセントークDayで活動報告をおこなった。さらに、活動中に訪れた支援現場のNPO（信愛塾）や学校（富士見中学校）、行政（なか国際交流ラウンジ）の取り組みと学生が果たせる社会的役割を紹介する資料を作成し、支援の現状と課題について、広く学生が知る機会を作った。ボラセントークDayには、大学近隣の戸塚在住の外国につながる子どもを支援する学生グループ「こ・こ・ろ」のメンバーが多く参加し、学生同士の経験交流の場となった。

#### 5. プログラムの影響の広がり

プログラム参加学生は、事後活動としてYOKE主催の国際機関の活動紹介セミナー「地球市民講座」に企画段階や当日の運営スタッフとして関わることで、学生の視点からアイデアを出すなど、国際機関と学生を結びつけるパイプ役として国際機関との絆を深めている。

また本年は2006年度春のプログラム参加学生がセンターを訪れ、プログラム参加が大学院での研究に発展したと報告があった。その卒業生は現在では東京大学大学院の博士課程に在籍し、FAOやJICAと連携しながら開発援助の影響評価の研究を進めている。プログラムが目指している「大学で目指した学問と現場での実践の融合及びその応用、国際性豊かな資質と世界的な問題を視野に入れて活動できる人材の育成」が具体的な姿として現われている例といえよう。

## 6. まとめ

本稿ではプログラムを通じた学生の学びと社会的な広がりについて、大学のボランティアセンターの視点から述べてきた。今年取り組みを通して学生は国際機関での「体験」を「学び」として昇華し、その学びの成果を生かして「行動」することで社会への貢献につなげていく、プログラムの社会的な意味が見えてきた。

今後はさらにYOKE、国際機関、学生、大学が連携を深めながら、国際的な視野で問題解決に取り組む学生の育成に向けて、努力していきたい。

【表1】「国際機関実務体験プログラム」スケジュールと役割分担

プログラム説明会[大学] 春期:2009年11月 夏期:2010年5月	・YOKEからプログラム及び国際機関での研修内容の説明 ・大学VCから、応募方法の説明とプログラム修了学生から体験談の紹介
学生の選考[大学]	・書類審査及び面接
大学オリエンテーション[大学] ★ 春期:2009年12月、2010年1月 夏期:2010年6月、7月	・学生の研修テーマ設定の準備 ★ ・国際機関の活動に関する事前学習 ★ ・研修上の留意点の伝達
学生と国際機関の面談[国際機関] 春期:2009年12月 夏期:2010年7月	・国際機関の概要と研修内容の説明 ・研修スケジュール(100時間)の作成
YOKEオリエンテーション[YOKE] 春期:2010年1月 夏期:2010年7月	・4大学合同の学生顔合わせ ・プログラム趣旨及びスケジュールの確認、研修時の心構えと注意事項の伝達 ・研修テーマと目標を学生が発表 ・合意文書と研修スケジュール(100時間)の提出
国際機関での実務体験[国際機関] 春期:2010年2月～3月 夏期:2010年8月～9月	[活動先] 春期:国連大学高等研究所(UNU-IAS)、 アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター(IUC) 夏期:国連食糧農業機関(FAO)、(財)横浜市国際交流協会(YOKE)
中間研修会[YOKE] 春期:2010年2月 夏期:2010年8月	・国際機関、学生、大学担当者による3者面談 ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング ・国際機関見学(参加学生)
最終報告会[YOKE] 春期:2010年3月 夏期:2010年9月	・学生による研修成果のプレゼンテーション(国際機関、大学担当者同席) ・YOKEと大学担当者の合同ミーティング
報告書[YOKE] 春期:2010年3月 夏期:2010年9月	・プログラム参加から得た学びと今後の課題をまとめる (YOKE、国際機関、大学に提出)
プログラム総括会[大学] ★ 春期:2010年3月 夏期:2010年9月	・活動の成果と課題に関する振り返りと考察 ★ ・プログラム参加による影響の広がり考察する(ワークショップ形式) ★

★は本ボランティアセンターが独自に実施しているもの

(市川)

## 日米 NPO ボランティア体験学習プログラムについて

### 1. はじめに

本プログラムは 2005 年度からスタートし、2006 年度以降は体験学習プログラムとして工夫と改良を続けてきた（詳細はボランティアセンター 2005 年度、2006 年度、2007 年度、2008 年度、2009 年度報告書を参照）。今年度で 6 回目の実施となったが、この期間、学部の垣根を超えて多くの学生たち（主に 1、2 年生）が、プログラムの参加を通して様々な体験を共有し、社会について思考し、社会的活動に関わるための基礎力の向上を目指して、奮闘してきた。その結果、学生たちは社会参加のきっかけを見出したり、自らも活動を立ち上げたりしている。また、彼らの進学や就職などにも影響を与えており、卒業後もその経験を活かしたり、同期のメンバーだけではなく修了生同士のつながりも創られたりしている。また、本プログラムは、当初からプログラムパートナーとして共に歩んでくださっているアメリカ NGO 法人日本太平洋資料ネットワーク（以下、JPRN）をはじめとしたアメリカの NPO 及び関係者の皆様、そしてセカンドハーベスト・ジャパン（以下、2HJ）と、特定非営利活動法人ビッグイシュー基金（以下、ビッグイシュー）をはじめとする、日本の NPO 及び関係者の皆様のご支援とご協力を賜りながら、成長と変化を続けてきた。このようなプロセスの過程において、本プログラムは大学当局からも、授業科目としての開講を目指した議論の対象となっていくた。そして昨年度のボランティアセンター規程改定において、センターが学生への情報提供および助言という「つなぎ」としての役割に重点を置いた業務から、共通教育機関としてのボランティアセンターへと大きく踏み出すことになったことによって、この議論は一気に現実味を帯びることとなった。具体的には、新規程において新たに「業務」に加えられた項目のうち、(1)「サービス・ラーニング・プログラムの企画、実施」に該当する（詳細はボランティアセンター 2009 年度報告書参照）。さらに、本学心理学部は 1 年から 4 年まで一貫して白金校地での教育を実施してきたが、2010 年度から、1・2 年生科目を横浜校地で開講することとなり、明治学院大学の 6 学部生すべてが横浜スタートとなった。このようなプログラムおよび、環境の変化とタイミングが重なり、来年度（2011 年度）秋学期（後期）より、当プログラムは単位認定科目として、横浜校舎で正式に開講する運びとなった。

以上のように、「結果」として本プログラムは科目として、来年度から新たなスタートを切ることになったが、そもそも本プログラムは、科目化することを目的としてスタートしたものではなかった。したがって、スタート時にはこのような帰結を、誰も予想できなかつただろう。したがって、今回の科目化が、上述したようなプロセスにおいて実現したものであるということは、本プログラムが最も誇るべき点であり、今後もその根底にある部分を引き継ぎながら、成長と変化を続けていきたいと考えている。つまり、本プログラムに関わる全ての人々——参加学生、日米の NPO およびその関係者、本学教職員、その他本プログラムを評価し、支えてくださった様々な方々——の、5 年に及ぶプロセス

の結果としての変容であり、評価のカタチであるにとらえない。奇しくも本プログラムは「貧困」と「マイノリティ」をテーマに設定しているが、昨今、社会でしきりに叫ばれている多様な立場の人々の「つながり」の構築や「共生社会」の実現へのヒントを、本プログラムも孕んでいることを確認できたことについて、感謝と責任を意識しながら今後も進めていきたい。また、本学は2013年に150周年を迎えるが、今回の科目化を通して、長年蓄積してきた教育理念である「Do For Others（他者への貢献）」の多角的な議論と実践が可能であることと、本プログラムの礎となっていることを改めて確認できたことは、今後の大きな糧になるだろう。そして言うまでも無いが、今回の科目化は、全ての関係者の皆様の今までのご支援とご協力の賜物である。そして引き続き、今後の新たなステージへ参画してくださることに對し、心から感謝する。

ボランティアに関する「学び」は、単なる現場の出来事の整理に終わってはならない。また「実践」が、無自覚なエゴ活動であってもならない。現場に立ち、思考し、協働的实践を織りなすとはどのようなことか。本プログラムは、科目化された後も、引き続き受講生らが、日米での理論と実践の中に身を置きながら、「振り返り」を重視し、その過程で自身の相対化を繰り返し、「見えていないもの」を見る力を養い、自らが学びと成長を探求し、将来的なコミュニティへの貢献力の素地を培うことを目指す。そして、「ボランティアは良い事」という無条件なパラダイムを孕む危険性も含めて、ボランティアを複眼的に検討し、実践の創出を促す機会となることも目指していきたい。

## 2. プログラム実施報告

本プログラムは実施期間が11月から7月であるため、本書でプログラム全体を報告することができないが、本稿では2009年度プログラム（2009年11月～2010年1月の内容については「明治学院大学ボランティアセンター報告書第6号（2009）」参照、本文では2010年2月～2010年7月までを報告）、2010年度プログラム（2010年11月～2011年1月現在までを報告）について扱う。

### 2-1. 2009年度プログラムについて

事前課題や事前準備を経て、参加学生は2010年2月、アメリカ、サンフランシスコ・パークレーへ向けて出発した。帰国後ミーティングでは、アメリカでの様子や学びを全員から報告してもらい、参加者全員で改めて共有した。同時にアメリカで受け入れを引き受けてくださっているJPRNと現地での学生の様子や個々の出来事や成長を確認しながら、帰国後のプログラムの方向性について報告・相談を重ねたことで、よりきめ細やかな指導とフォローが可能となった。また、2009年度より新たに、ビッグイシューの全面的な協力のもと、「道端留学」を本プログラム用に構成し、帰国直後のプログラムとして加えることができた。これはホームレスだけが販売できるストリートペーパー「ビッグイシュー」を販売者の方々と一緒に渋谷の路上に立ち、販売を体験するというもので、活動の前後にはスタッフ

の方と販売者の方の講義、スタッフの方々とのディスカッションと発表が含まれる。前年度までは帰国後すぐに報告会の準備に入ったのだが、今年度は帰国直後に日本でプログラムを加えたことで、昨年度まで解消できなかった、参加学生たちの日米における経験と価値観の偏りを改善することができた。こうして約4か月間の日米における理論と実践を通じた学習と、現場と役割の往復を繰り返しながら、参加学生たちは自らの意見をアウトプットし、共有するプロセスを通して、少しずつ自身を客観的にとらえ、社会や他者の存在を内在化していく経験を積んでいった。そして新学期が始まったころには大学近隣の地域の運動会やお祭りに事前準備から関わったり、当日も他の学生たちをとりまとめるなどの動きが見られるようになったりした。それは、同時に進行していた報告会の準備にも影響し、日米での学びを自身の日常に落とし込んでいながら考察できるようになっていった。例年、不慣れた海外での集団生活を通して、学生たちは否応無しに人間関係構築のプロセスにおける楽しさと難しさを経験し、その時どのように対応するのか自らの判断が問われる。同時に、多くの参加学生たちが「このプログラムの中で最も重要で最も学びの多かったプログラム」だと口にする、毎晩のミーティング（振り返り）を通して自らを振り返り、出来事を客観的に分析し、発言する力と傾聴する力を養う。2009年度の参加学生たちは、渡米中の共同生活の中で起こった「衝突」を事例に「共に生きる」というテーマで、現地でのミーティングの様子を再現する方法で全体発表を行った。彼らは、同じ大学に通う学生でさえ、それぞれ価値観も生き方も異なっているという経験を通して、自分とは「遠い」存在に対してではなく、まさに自分たちと「同じような」存在に対してこそ向き合うことが難しいことを痛烈に感じたのである。そして、その視座を確認した上で、自分たちとは一見「遠い」存在に対してどのように向き合えるのかを考え、行動し始めたのである。それは、本学の教育理念である「Do For Others（他者への貢献）」について、深く悩み、考えるプロセスでもあった。それは、学生たちが帰国後からしきりに口にしていた、「なんだかモヤモヤする」という発言からも伺える。本プログラムは、どちらかと言えば学生たちに「スッキリ」ではなく「モヤモヤ」を与えることを目指している。「モヤモヤ」することで、学生たちが自ら思考し、文献収集や情報検索などの原動力につながり、何らかの行動につながることを期待している。換言するなら、学生に「答え」を与えるのではなく、彼らが「答え」を「探す」という、大学の基本的な学びの構造に依拠したアプローチを実施できただけかもしれないが、2009年度プログラムを通してこの手ごたえを具体的に得ることができたのは、今後に向けた大きな成果であった。例えば、毎年参加学生たちに任意で協力してもらっている最終アンケート中の、「このプログラムの魅力を一言で表現するなら何ですか？」という質問項目に対し、「断崖絶壁から突然落とされる。それでも這い上がる。」「潜在能力の開花」「“学”です。学ぶことが多すぎるプログラムです。」「未完成。プログラムは終了しても、これから繋げていくべきことばかりだから。」といった回答が寄せられたことは、彼らが本プログラムの目的とねらいを理解してくれた証として、来年度に向けた何よりの励みとなった。一方、2009年度の反省としては、プログラム終了後の協力団体との意見交換を通

して、プログラムで設定している以外のボランティア活動をはじめとした社会経験を積むことが、特に渡米中のプログラムの充実のためには必要不可欠であることを確認することができた。しかし、単に、プログラムの中でボランティア活動を増やしたり、学生に「強制的に」行かせたりするなどの措置が適当であるとは考えにくく、課題を改善するための方法とその導入については工夫が必要である。

## 2-2. 2010年度プログラムについて

2010年度プログラムでは、選考の結果、7名の参加学生が決定した。内訳は男子1名、女子6名であり、男子が2年生、女子は全員が1年生である。例年、男女の割合では女子の応募が圧倒的に多い傾向は変わらないが、このように参加学生の大部分を低学年（1年生）が占めたことは今年度が初めてである。今年度も2HJ、ビッグイシューより推薦いただいた4冊の指定文献に対するレポート作成や、2HJ 協力プログラムとして、2HJ で実施している炊き出しプログラムへの参加（準備から配給、後片付けまでの活動参加及び受給者の方とのコミュニケーション、理事長を始めスタッフやボランティアの方々との振り返りミーティング）、理事長であるチャールズ・E・マクジルトン氏による講義が行われた。また、今年度は1年生が多いことから、渡米前の筆者による講義もボランティアをテーマとし、講義後のディスカッションと発表では議論の視座だけではなく展開の方法やヒントについても取り上げた。そして昨年度の課題として明らかになった、プログラムで設定されている以外のボランティア・社会経験の獲得とその機会の提供という点において、新たな展開を見出すことができた。具体的には、オリエンテーションや日々のメーリングリストにおいて、プログラム担当者（筆者）から様々な情報（特に、本プログラムでお世話になるNPOやプログラムテーマに関連するボランティア活動や講演会など）を提供し、これらの機会に筆者も参加する旨も一緒に流した。また、プログラム修了生と白金学生スタッフのメーリングリストにも同じ情報を流した。すると、一緒に参加したいと申し出る学生が現われ始めた。そして12月、ビッグイシューのクリスマス会に2009年度の修了生と2010年度の参加学生とが参加したことによって、1月に行われた「ビッグイシュートレイン」という、企画の参加につながった。活動後も意見交換の場で発言したり、アイデアを提案したり、学生として何ができるのか、彼らなりに具体的に考えるようになっていった。そして来年度（2011年度）5月の実施を目指して、2HJの協力のもと、初めて「フードドライブ（事前のプロモーション活動の後、食糧を集めてフードバンクに寄付をするイベント）」を学内で実施する企画委員会を、2010年度参加学生有志が中心になって立ち上げる運びとなった。今後は渡米し、JPRNの協力のもとサンフランシスコ・バークレーで共同生活を送りながら、各種プログラムに参加し、帰国後はビッグイシューの協力のもと「道端留学」、報告会の開催と報告書執筆を予定しているが、今年度は今まで帰国後にみられた学生たちの物事の見方や、それに伴う自発的な動きを渡米前に見出すことができた。学生たちの新たな可能性について、今後も期待しつつ、彼らを全力でサポートしていきたい。（李）

## 命をつなぐ緑の回廊～パールの森プロジェクト ボルネオ・スタディツアー 2010

ボルネオ島は3カ国にまたがり、北東部はマレーシアのサバ州、サラワク州、ブルネイ、南側はインドネシア（東カリマンタン州・西カリマンタン州・南カリマンタン州・中央カリマンタン州）に分かれる。赤道直下にあり、面積は約74万平方キロメートル（日本の2倍）で、世界で3番目に大きな島（1番目はグリーンランド、2番目はニューギニア島）である。熱帯雨林は生物の生産性が高く多種多様な動植物が生息し、生物多様性の最も豊かなエリアと言われており、ボルネオオランウータン、テングザルなどボルネオ固有種も多い。しかし近年、ボルネオは1990年代からアブラヤシのプランテーションの開発が急速に進み、保護区は分断化されており、野生動物は個体数の減少だけでなく、遺伝子の多様性が失われている。一方、アブラヤシから採取されるパーム油は食用、洗剤、バイオ燃料など日常生活でよく使われており、発展途上国の人々の重要な糧となっている。持続可能な資源利用を考えるとともに、野生生物の絶滅を防ぐために、すぐアクションを起こす必要がある。ボルネオ緑の回廊プロジェクトは、キナバタンガン川・セガマ川沿いにある保護区、保存林の間にある土地（2万ha）を確保し、野生動物が自由に移動できるようにするもので、現地のボルネオ保全トラスト（以下、BCT）がプラットフォームとなっている。土地の確保は、違法占拠地に対して行政への返還を働きかける、使用していない土地は所有者に行政への寄付を呼びかける、購入するといった方法で行っており、購入した土地はBCTの所有となり、野生動物のために確保される<sup>1</sup>。明治学院大学ボランティアセンターは、2008年7月より、NPO法人BCTジャパンと学生チームMGパールとの3者協働プロジェクトとして、「パールの森プロジェクト」を展開してきた。600円で5㎡の土地を購入できることから、学生たちは自らボルネオ産の淡水パールをデザイン・製作をしたオリジナルの商品を白金・横浜両校地や白金の地域のお祭りやイベントでMGパールとして販売し、BCTジャパンを通してボルネオ緑の回廊プロジェクトに寄付している。しかし、本プロジェクトの主旨は「大変な状況のボルネオを助けよう」ということではない。「大変な状況のボルネオ」と、自分たちの便利で豊かな生活の「見えにくい」相関を知り、自分にできることを考え、行動していくことにある。したがって本プロジェクトは「ボルネオへの恩返し」という価値観を3者で共有しており、学生の活動内容はパールアクセサリーの販売だけではなく、これを手段としてどのように社会との連帯を広めていけるかに主眼を置いている。具体例としては、学内でのパールアクセサリー製作のワークショップ開催や、プロジェクト発足時より毎年12月に本学にて開催しているイベント「ジャングルクリスマスフェスタ in 白金」、校舎近隣地域住民との交流や報告会の開催なども積極的に行い、様々な方法を用いて活動を展開している。これらの活動を通して、学内や地域に広くボルネオ島の現状が、私たちの豊かで便利な生活と密接に関わっている事実を多くの人に知ってもらい、人間と限りある

---

<sup>1</sup>（以上、BCTジャパンHPより抜粋：<http://www.bctj.jp/project/project.html>）

自然が共に生きていくことについて考え、行動を起こすきっかけになることを目指している。ボランティアセンターは大学における一部署として、BCT ジャパンの協力を得ながら学生たちの活動を支援している。具体的には企画の立案や実施、プロモーションの方法や媒体の作成方法、ファンドレイジングに関わることなどの指導や助言、各種情報提供等の教育的支援に加え、イベント会場や必要物品等の確保などの支援も行っている。しかし、このような蓄積を経てきた中で、「自分の目で現場を確認して活動を更に充実させたい」という学生たちの声が聞かれるようになった。そして2年間にわたる活動の実績と継続が大学に認められ、BCT ジャパンおよび（株）日本エコプランニングサービスの全面的な協力を得ることもでき、本企画が実現した。催行にあたり、今まで活動してきた学生たちが日本での活動と現地のつながりを再確認し、意識化された想いを日本で具現化することを期待した。また、新たな学生が加わることにより、更なる全学的な活動の輪の広がりを目指した。実施にあたり、説明会を、4月12日（月）、22日（木）に白金校舎、4月15日（木）、19日（月）横浜校舎で開催し、各校舎で募集要項を配布した。催行日程は、2010年8月30日（月）～2010年9月6日（月）とし（詳細な旅程は表1参照）、企画主旨に伴い、いくつか応募条件を設けた。

表1. 命をつなぐ緑の回廊～パールの森プロジェクト ボルネオ・スタディツアー 日程

8日間	訪問都市	主なスケジュール
8/30 (月)	成田 コタキナバル	空路、コタキナバルへ 到着後、ホテルへ
8/31 (火)	コタキナバル サンダカン	午前：ロッカウィワイルドライフパークへ（絶滅危惧種など動物の見学） 午後：サンダカンへ移動 レインフォレストディスカバリーセンター（RDC）へ（施設見学、トレッキング等） セビロクエッジリゾートへ
9/1 (水)	サンダカン スカウ村	午前：オランウータンリハビリテーションセンター（ORC）へ（VTR視聴、補給餌見学など） 午後：ケラタムプランテーションへ移動。プランテーション見学、搾油工場見学 夕刻：スカウ村へ移動。ホームステイプログラム開始
9/2 (木)	スカウ村	午前：スタディサイトオランウータン調査地区トレイル、植林地草刈り 午後：リバークルーズ（BCTの森、消防ホースの橋見学） 夜：村の人たちとぼちよぼちよダンス交流会
9/3 (金)	スカウ村	午前：早朝クルーズ、クルーズ後植林 午後：KOCPスタッフのプレゼンテーション MGパール活動紹介、パールアクセサリ制作ワークショップ開催 夜：スタッフ&村人とぼちよぼちよダンス交流会
9/4 (土)	スカウ村 ピリット村	午前：早朝ジャングルクルーズ、ボルネオゾウ保全ユニットの活動同行 午後：キナバタン・ジャングルキャンプ（KJC）へ、ジャングルクルーズ 夜：ナイトリバークルーズ
9/5 (日)	ピリット村 コタキナバタンガン サンダカン コタキナバル	午前：モーニングクルーズ 午後：ピリット村出発、サンダカン市内へ移動、日本人墓地訪問 夜：サンダカン空港、コタキナバルへ
9/6 (月)	コタキナバル 成田	午前：自由行動 午後：空路、成田へ 到着後、解散

まず、春学期（前期）の活動として、白金グローバルフェスタ 2010（5月15、16日@白金高輪）へのMG パール出店活動（日々のパール製作や出店準備、当日の出店など、主に空きコマを利用した活動も含む）を求めた。また、事前学習として、DVD「パームオイル 近くて遠い油のはなし」の鑑賞会やBCT 事業責任者 坪内俊憲氏による講演会（6月）への参加を設定した。また、現地で村人との交流会の事前準備として、ぼちよぼちよ（マレーシアのフォークダンス）講習会も企画した。秋学期（後期）は、春学期と現地訪問の集大成として、ジャングルクリスマスフェスタ in 白金 2010の企画立案（スタディ・ツアー報告も含む）及び、その他日々の活動参加を求めた。

募集の結果、10名の学生の応募があり、5月から本格的に事前学習と準備が始まった。募集要項で設定していなかったが、訪問先であるサンダカンについて、映画や書籍などを紹介し、事前学習を行った<sup>2</sup>。また、現地治安及び疾病関係について、外務省や旅行会社、BCT ジャパンより情報収集し、現地での急病の際の搬送経路など確認した。また、ボランティアセンター運営委員である平山恵先生の応急処置講習会に学生たちと参加したり、外務省から「NGO フィールドスタッフのための健康・安全対策ハンドブック」を取りよせて配布したり、その他注意事項についても学生たちに随時連絡した。

現地では、BCT 事業責任者 坪内俊憲氏、(株)日本エコプランニングサービス田中正純氏や、現地訪問先スタッフやガイドの全面的な協力を得ることができ、いつでも専門家たちから豊富な知識と情報をいただける最高の環境で今までの活動を再考することができた。また、今回ボランティアセンターよりスタッフ（筆者）が同行して学生たちの安全と健康の確保に努めるとともに、日々の振り返りを行った。最初の2日間はジャングルで過ごし、学生たちはそのダイナミズムとパワーに魅了されっぱなしだった。特に本プロジェクトの象徴でもある、オランウータンに出会ったときの感動は大きかった。また、2日目に訪問したRDCで坪内氏のガイドのもと、夕方から夜にかけて変化するジャングルの中で、森の声に全員が無言で耳をじっと傾けた1時間あまりは命と感動に満ちたものだった。大自然に身をゆだね、自分がいかに「ちっぽけな」存在なのかを確認し、自然の中で生きていくという本当の意味を思い知らされる体験は、どんなに巧みな言葉でも適わない。森の声の変化とは森の主の交代を意味するものでもあり、そこには生物多様性の保持における自然界のルールと秩序があり、共生社会が叫ばれる人間社会において未だに実現できない社会がそこにはあった。この感動的な体験は帰国後、12月に開催したジャングルクリスマスフェスタにおいて、「森ヨガ」という企画立案につながることになる。このような大自然の感動の中でどっぷり過ごした後、3日目に訪問したアブラヤシのプランテーション及び搾油工場、私たちはそのコントラストの激しさに苦しむことになる。訪問させていただいた工場は、非常に開放的でプランテーションも工場内も隅々まで快く見学させてくれた。しかし見学後のバス車中は重苦しい空気が漂った。学生たちの口から語られた苦しさ——それはプランテーションではジャングルで感じたよ

<sup>2</sup> 映画「サンダカン八番娼館・望郷」、書籍「サンダカン八番娼館 底辺女性史序章」山崎朋子著、筑摩書房、1972年 等。

うな命を感じなかったことだった。プランテーション内にあった命は、アブラヤシの木、ハエ、スイギユウ、そして人間だけだった。また、プランテーション内は学校や宿舎などの福利厚生が整っていたが、そこで代々働く家族もいることを知り、果てしなく続くプランテーションの中で一生を送る現実、そしてその労働に支えられている自分たちの生活などに思いを巡らせながら、簡単には出ない「答え」について各自が思いを巡らせた。この強烈なコントラストの体験以降、学生たちの目が変わった。今まで見えていなかったものが見えるようになってきたのだ。たとえば、一見豊かに広がるジャングルの森のすぐ向こうに広がるアブラヤシの「森」が見えるようになってきた。そして川辺の木にぶら下がる野生のオランウータンとの遭遇という「感動」が、本来水が嫌いなはずのオランウータンと水辺で遭遇する意味を考えるようになっていた。ある学生は、セピロクの ORC で親を殺されたオランウータンの孤児らを見た日の振り返り時、「野生で見た親と一緒にいたオランウータンの子どもとは違う。親を目の前で殺される経験は想像を絶する辛さだが、オランウータンも当たり前だが人間と同じ」とつぶやき、その後言葉を発することができなかった。このような強烈な現地体験と学びが多かった本ツアーだが、現地の方々に、MG パールの活動紹介や、アクセサリ制作ワークショップができたことは、学生たちの自尊心に大きな刺激を与えた。「こんな活動をしてきていた日本の大学生がいたことに驚きと感謝の気持ちです。ありがとう」という言葉をいただけたことで、今まで空をつかむような感覚だったボルネオが一気に身近な存在になった。帰国後の学生たちの変化は前年度までと比べものにならないほど大きかった。それは「今まで想像の域でしか活動できず、啓発活動という意味で限界を感じていたが、それが吹っ切れて今までの全てがつながった」と、現地最後の振り返りで話した MG パール代表の学生の言葉が行動として表れたものだった。ジャングルクリスマスフェスタでは学生によるオリジナル企画の立案やそれに伴う広報活動や段取りやマネージメントに奔走する姿が見られたり、ボラセントークイベントでの「マレー語講座」の実施や、スタディツアーホームページの開設など、学生たちの自発的な動きが活発になった（その他詳細は、本報告書 33～34 ページを参照願いたい）。以上のように、今年度スタディツアーを催行できたことで、学生が積極的に関わり生み出していくという動きにつながり、プロジェクトの質は大きく向上した。また、センターとして、学生への教育支援と機会の提供という意味も大きな成果を収めることができた。何より、無事故で全員が健康な状態で本ツアーを催行できたことは、協力関係者の皆様に心から感謝すべき点である。プロジェクト全体としては、3者協働プロジェクトの構成員が同じ体験を共有できたことにより、3者の結束は更に固くなったように感じる。社会貢献という点からは決して十分な「成果」が出せていない現状だが、BCT ジャパンからは、学生が目覚ましい成長にびっくりした、今後もぜひ一緒に頑張りましょうと力強くおっしゃっていただいた。今後は、プロジェクトの主旨である社会との情報共有と啓発というアプローチをどのように展開できるのかが問われている。来年度の催行に向けて、プロジェクトとの連動を視野に入れ、今年度の成果と課題を踏まえて、ツアーとその前後のコンテンツについて、再度検討と見直しを図りたい。

(李)

## ソニーマーケティング学生ボランティアファンドについて

このファンドは、大学生の社会参加への第一歩となり、また、社会をより良くしていこうとするリーダーシップの芽生えとなるようなボランティア活動を支援することを目的とし、ソニーマーケティング株式会社の提案により、日本初の全国の大学生ボランティアを対象とするファンドとして2001年から始まった。当初より本学ボランティアセンターが事務局を担当させていただいている（ソニーマーケティング学生ボランティアファンドのホームページ [www.sony.co.jp/v](http://www.sony.co.jp/v)）。

今回は第10回目の募集となり、前回に引き続きAコース（助成金25万円を上限）およびBコース（助成金10万円を上限。こちらのコースは、新たにボランティア活動を始めようというグループや比較的費用のかからない活動規模の小さなグループにも助成をしようという考えのもと設けられている）を設定し、2010年10月4日～11月11日に募集を行った。審査では、前年同様「学生ならではの企画であるか」「企画が自己満足に終わっていないか、プログラムに社会性はあるか」「活動のユニークさ、チャレンジ性」「企画内容に計画性はあるか」「これまでにないような新規性はあるか」「ファンドが有効に生かされるか」の6つを評価基準とし、応募総数64団体の中から、予備審査、本審査を経て、Aコース17団体、Bコース6団体、合計23団体が助成対象として決定された。大学別には、国立大学10大学、公立大学10大学、私立大学44大学の合計64大学からの応募となった。分野別の応募状況としては、国際支援が一番多く、次いで地域コミュニティへの関心が高くなった。過疎化、農業地の活性化など、地域の問題に目を向けた地域密着型活動が見受けられたのも、そのあらわれといえる。他には、ボランティア振興、子ども、障がい者、教育、在日外国人、環境などがテーマとして扱われていた。活動地域としては国内48件、海外16件であり、海外の大半が東南アジアとなり、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、インドネシアなどが多くなっている。本学からは、Bコースで1団体が助成対象として選ばれている。また、新規立ち上げの活動が26件と多く、10人以下の小規模団体が目立ったことも今年の特徴としてあげられる。

このあと、助成金を受けた団体はそれぞれ活動を行い、2011年6月には報告会が予定されている。報告会には助成団体の学生が全国から一堂に会し、いくつかの団体による活動報告や全体懇親会のほか、第10回という節目でもあるので、OBなどによるパネルディスカッションも検討している。当日は各団体の活動報告をまとめた報告書も配布する予定である。

(武村)

## 聴覚障がい学生支援について

### 1. 聴覚障がい学生本人への支援

ボランティアセンターでは、昨年に引き続き、白金および横浜校舎にそれぞれ1名のノートテイクコーディネーターを配置し、授業での情報保障を中心に、聴覚障がい学生支援に取り組んだ。

本学の情報保障には、①手書きによるノートテイク、②パソコンノートテイク（以下、PCノートテイク）、③手話通訳、④教材（ビデオなど）の文字起こし、がある。ボランティアセンターでは、聴覚障がい学生（以下、利用学生）からの申込みを受けて、ノートテイクや手話通訳者の募集を行い、実際に授業で通訳することが決まった段階で登録してもらい、授業のほか入学式や卒業式、各種オリエンテーションや学内で実施される講演会、オープンキャンパスなどへ通訳者派遣を行っている。

今年度実際に通訳に入った人数は学生50名、地域ノートテイク11名、学生手話通訳者2名、地域手話通訳者1名であり、サポートを必要とする利用学生は新入生2名を含む6名であった。利用学生6名のうち主な履修校地が白金校舎となる学生が4名、横浜校舎が2名であり、春学期にノートテイクを必要とする科目数は30科目（内訳は白金15、横浜15）、秋学期は24科目（内訳は白金11、横浜13）、手話通訳については、今年度は授業での利用が1回であった。

ノートテイクに関していえば、ノートテイクをやりたいと申し出る学生が増加する傾向にありながらも、利用学生がノートテイクを必要とする授業時間とノートテイクの都合が必ずしも合致しないことから、マッチングには困難が伴った。さらに、専門科目に関しては、ノートテイクをする上である程度の専門知識が必要なため、この点での人員確保も相変わらずの課題であった。ただ、今年度は、学科やその科目を担当している教員に協力いただき、利用学生と同じ学科の上級生や大学院生へ呼びかけてノートテイクが決まった科目があり、しかも、それが複数の学科で実現した。他にも、外国語科目の履修に際して、利用学生用に別途クラスが設定されたり、ノートテイクを配置できるクラスに変更していただくなど、各方面で格段の配慮を得た。このように、利用学生にとって学びやすい環境を提供しようという大学の姿勢が目に見える形で現れた1年となった。PCノートテイクに関しては、今年度も7科目（春学期4科目、秋学期3科目）で行ったが、前年同様、学生と地域PCノートテイクのペア、あるいは学生同士の場合には授業での経験がある学生と初心者の学生がペアを組むなど、マッチングを工夫した。手書きに比べてより多くの情報保障を行える点で、今後もPCノートテイクの必要性は増すと考えられるが、こちらも人員の確保が困難であった。募集広報の点で、さらなる工夫が必要と考えられる。

### 2. ノートテイクの養成

センターでは、外部から講師を招き5月と10月に白金・横浜それぞれの校舎で初心者向けノートテイク養成講座を実施している（受講者数は合計25名。2日間連続受講形式で受講時間は合計6時間）。養成講座に参加できなかった学生には、コーディネーターが後日個別研修を実施し、養成講座や個別研

修を経た初心者学生には、先輩ノートテイカーの隣で実習してからノートテイクに入るなど段階的なマッチングを行うようにしている。また、コーディネーターがノートテイカーの入っている授業に2回以上は入るようにして、それぞれのノートテイカーにアドバイスを行った。また、PCノートテイカー養成講座も実施した（受講者数は合計8名。受講形式や受講時間はノートテイカー養成講座と同様）。機材や専用ソフトのインストールなど情報センターの協力を得ながら、こちらも外部から講師を招き、6月に白金、10月に横浜校舎で行った。なお、各学期に2回ずつ、利用学生からは「利用学生報告書」、通訳者からは「通訳者報告書」を提出してもらっている。これは、実際に通訳に入った、あるいは通訳を受けた感想や反省、要望や質問などをそれぞれの授業について書いてもらうもので、コーディネーターやテイイクに関してのアドバイスをするうえでの参考資料となっている。また、学生ノートテイカー事務連絡会を各学期に1度開き、必要書類の配付とともにサポートに関する注意事項を伝え、普段顔を合わせる事のないノートテイカー同士の顔合わせの機会とした。

### 3. 聴覚障がいへの理解を深めるための啓発

『聴覚障がい学生サポートの手引き』を、教員用と本人・通訳者用の2種類作成し、授業担当教員、利用学生が所属する学科教員、利用学生、通訳者、関連部署に配布した。

11月には学生サポートセンターとの共催で公開講演会「大学での障がい学生支援－理解から、自立できる共生社会へ－」を白金校舎で行った。第2部では、本学卒業生でご自身も聴覚障がいをお持ちの長野留美子さんを講師にお招きして『聴覚障がい学生へのサポート－卒業生の立場から－』のテーマでお話しいただいた。また、利用学生と通訳者、通訳者同士が交流する場として7月と12月に交流会を設定した。12月の交流会では支援を受けている利用学生本人に『私の耳』というテーマで話してもらうなど、聴覚障がいへの理解と交流を深める機会を持った。

障がいを持つ学生が、障がいを持たない学生と同じスタートラインにたてるよう環境を整えることについて、本学においても、以前に比べるとかなり理解が深まり、支援に対する協力を得られるようになった。その現れとして、いよいよ2011年度から、障がい学生支援の窓口となる部署が、学生サポートセンターとして、白金・横浜それぞれの校舎に開室される。これまでボランティアセンターが行ってきた聴覚障がい学生に関する支援業務も、すべて学生サポートセンターに移行されることになる。

今年度は利用学生が6名となり、利用学生同士の、学科や学年を超えたつながりも深まり、その中で、障がいを受け入れ、支援を受ける心構えが自然と育まれたケースが見受けられたように感じる。また、聞こえる学生にとって「聞こえにくい」または「聞こえの不自由な」学生への理解も浸透しつつあり、サポートを自然なこととしてとらえる学生が増えているようにも感じている。新しい体制への移行後も、学生が学生を支え、共に学ぶという姿勢を大切にして、障がい学生の支援が、より充実した内容で継続して行われていくよう期待したい。

(武村)